吉祥果

円頓寺だより

令和５年
８月号
【吉祥果 394 号】

七月一日のお盆施餓鬼法要にはたくさんの方にお参りいただき、無事にご供養できたことは皆様のご協力のたまものと感謝申し上げます。お寺の行事としては久しぶりの賑わいでした。コロナ前に戻すといっても、「コロナ前ってどんなだった？」と以前を忘れてたり、勘違いしていたりと、迎える私たちも、まずは思い出すことからといった状況でした。何より優先すべきは「皆様とともに供養する」ということで、これからは今回のような法要形式で行っていきます。日蓮大聖人のお手紙の一説に、

異体同心なれば万事を成し、同体異心なれば諸事叶事なしと申事は、外典三千余巻に定て候。殷の紂王は七十万騎なれども、同体異心なればいくさにまけぬ。周の武王は八百人なれども、異体同心なればかちぬ。一人の心なれども二つの心あれば、其の心たがいて成ずる事なし。百人千人なれども、一つ心なれば必ず事を成ず。

多勢に無勢とは少人数で勝ち目がないことだが、志を同じくした少人数が、まとまりのない多勢に打ち勝ったという中国の史実がある。つまり異体同心の人々が集まれば難事も乗り越えられ、思いもかなう。多人数でも一人ひとりの心中に二つの相反する思いがある同体異心の集団では、簡単なことも達成できないものだ。とお示しです。今回の法要も久しぶりに皆様一堂に会して、ただ集まれてよかったということだけでもうれしいことなのですが、ともにご先祖様の供養をしようという思いがあっての集まりであったことは、まさに異体同心であり、万事を成し得る力となったのではないでしょうか！すべての檀家さんの先祖様もお喜びになり、皆様もたくさんの功徳をいただかれたものと信じております。今後も、続けて共にご供養していきたいものです。

さて、今年も七月十五日には精霊送りを行いました。コロナ禍で多くの寺院が「檀家以外も受付けるから不特定多数が集まる」ということで、精霊送りを中止していましたが、当山では人数制限や、ロウソクの献灯供養を中止することで、他人との接触を最低限にして

実施し続けておりました。今年は土曜日の夜であったこともあり、家族中でお参りいただけたようです。お檀家のご夫婦が小学生のお子さんと一緒においでになり、受付で

「お祖父ちゃん、お馬さんのキュウリに乗っておうちに来てくれて、牛さんのナスに乗って帰って行くんでしょ。なんでお馬さんと牛さんか、お父さん知ってる？」

「なんで？」

「お馬さんは足が早いの、牛さんはゆっくりなの。お祖父ちゃんには、お馬さんで早くおうちに来てもらって、帰り道はゆっくり牛さんに乗って、お寺でお経を聞いて帰ってもらうんだよ。だからお寺に持ってくるんだよ」

「よく知ってるね」

とお父さんにいわれてニコニコ顔で本堂に向かいました。

これを聞いていた順番待ちのお爺さん。

「ああっ、茄子の牛を持ってくるのを忘れた！」

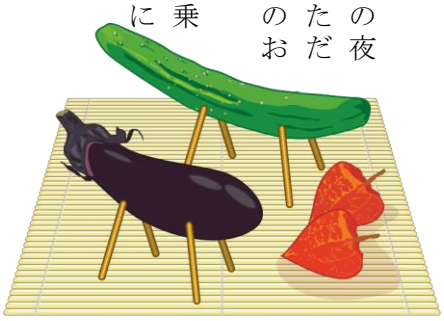
娘さんと思しき女性が

「お父さん、しょうがないわね。お母さんが帰れないといけないから、私が取りに帰ってあげるから待ってて」

とお爺さんを残して取りに帰ったようです。

受付の家内に

「すいませんね。年取ると忘れ物が多くなります。私が世話になっているお寺がコロナ禍で精霊送りを止めにしてしまって再開しないんです。



円頓寺さんは受付けてくださると聞いてやってきました。お世話いただき感謝です。あんな幼いお子さんから良いことと聞かせていただきました。こちらのお寺ではずっとお経をあげていただけているので、茄子の牛を持ってきてもらえば、家内もここでお経を聞いてゆっくりと帰れますね。

私も帰りの乗り物を持ってくるのを忘れちゃうようじゃ、ダメですね。『ばあさん、まだ帰りゃあすな』って、心のどこかで思ってるんでしょうかね」

と円頓寺のお檀家さんではない方も、喜んで精霊送りにおいでになっています。

このコロナ禍で多くの寺院が精霊送りを止めてしまったと聞いています。しかし同じように檀信徒さんも精霊送りに行くのを止めたということも聞きます。ゴミと一緒にして捨てるのは簡単なことです。でもご先祖様の気持ちになった時どうでしょう？「乗ってきたお馬さんがごみと一緒に捨てられている」。「乗って帰ろうにもお経が聞こえない」。「大事な乗り物がお供えされていない」とお嘆きかと心配になります。せっかくお盆の三日間、接待なさったんだから、気持ちよく送り出して、来年もまた来てねと手を振ってお別れしたいじゃありませんか。それが精霊送りです。

〈土壇場の弁〉三十六

日蓮大聖人は、明けやらぬうちに頚をはねよと依智三郎直重に催促され、覚悟のご様子。検視の平左衛門尉頼綱からの日蓮の頚を打てとの下知がありました。太刀取りの依智三郎直重の持つ太刀は、北条家に九代伝わる三尺二寸の名刀蛇胴丸。鞘を払い大聖人の後ろに回り、刀を打ち下ろすかと思えば、腰を屈めて大聖人に、

「日蓮御坊は出家の身。強盗夜討ちでも、謀反殺害の科でもない。ただ法華経を弘めるために諸宗を批判したまで。その罪で断罪の刑。いかに天下の厳命といっても、私も齢五十をすぎ、老い先短い身となって出家の頚を切るのは末恐ろしくございます。どうか今日より諸宗批判をやめて、念仏をお唱えなさい。そうしていただけば、私が責任もって命をお助け申し上げます」

と有り難い言葉をくださいましたが、そこは上行菩薩のご再誕、末法の大導師日蓮大菩薩、

「三郎直重殿、この日蓮は建長五年四月二十八日より、この日がくるのはわかっておりました。会い難き法華経に会い、この臭き頭を法華経に捧げ奉るは、砂を黄金にかえ、石を玉にかえるのと同じこと。これに過ぎた喜びはございません。覚悟はあります。頚を打ちなされ」

大聖人の動かぬ決意に、三郎直重、

「是非に及ばず、観念せよ。日蓮」

エーイ、と太刀を降り下ろし、大聖人の頚が…と思いますれば、降り下ろした蛇胴丸は刀尋段々壊（王難に遭い斬首の刃が振り下ろされたときに、観音様のお力で剣は粉々に折れて命を助けられるという法華経観音経）の教説通り、刀は三つ四つに折れ、手に残るは刀の柄ばかり。

「これは仕損じた。天下の恥、武家の名折れ」

と柄を投げ捨てて脇差に手を掛けたその時、江ノ島の方角より、満月のような光の玉がピカピカと輝き、迫ってきて、刑場の後の松の枝に掛かったかと思えば、直重の頭上にヒラヒラと襲いかかりました。直重は驚き脇差を真上に突き上げたものの目が眩み、後退り。ときに同じく一陣の風が吹いたかと思えば、間をおかずゴウゴウと吹きすさぶ大風が起こり、さらに土砂降りの大雨となったかと思えば、今度は大地が震動し、囲っていました矢来が一時に倒れてバタバタと。幕もふっとび、松明消えて、真の暗やみに包まれました。警護の役人も、あるものは馬上にうずくまり、また落馬する者、走って逃げる者。前代未聞の大騒動。泰然自若にお自我偈を唱えておいでの大聖人、この騒ぎに周りを見渡し、

「どうなさったお役人殿。大罪人日蓮を置いて遠ざかるとは。夜も明ければ見苦しい。サア、早くこちらに来て頚を打ちなされ」

と大声で呼びかけましても、誰一人近付く役人はおりません。

毎年版画の暑中見舞いをいただきます。
今年は月下美人。ありがとうございます。

母のお姉さんが毎年、岡山の白桃を送ってくれます。私は幼いころ白桃が届くのをとても楽しみに待っていました。そしてこの数年は、桃に加えて自身の畑でとれた野菜を送ってくれます。間もなく九十歳ですが、「私が元気で畑仕事をできる間は送ります。お礼は結構です。皆さんのおかげで元気に畑仕事ができるので、感謝の証です」とおっしゃって、畑で採れた時々の野菜を箱にいっぱい送ってくれます。畑に出ていれば近所の人も通りがかりに自分の姿を見て「ああ、あそこのお婆ちゃん、まだ元気でいるな」って思ってくれるから、元気でいる証なんだそうです。

この数年の間に三密を避けるためと、家族葬が主流となり、知人や近所の人に知らせず家族だけの葬式ばかりになっています。月参りに行くお檀家さんから「ご近所のお友達がお亡くなりなったんだけど、お葬式が終わってから聞いたの。後日、弔問に行ったけど、写真にお別れをいったってね。とても残念だったの」といった嘆きの言葉を何度も聞きました。コロナ禍で会えなかっただけに、余計にお葬式には行きたかったということなのです。

会いたい人には会うべきかもしれませんね。しかし再びコロナ感染者数が増えているようです。悩ましいところですね。

《八月・九月の行事予定》

※鬼子母神様ご祭礼
・八月十八日(金)
午後一時半より読経、法楽加持

※月回向
毎年八月は、お盆棚経のため、お寺で月参りを行っています。左記の日程にて、命日の回向をお寺にて行います。

①八月六日(日)　午前十時より
②八月十八日(金)　午後一時半より
③八月二十日(日)　午前十時より

◎希望者宅への訪問も致します。

※鬼子母神様大祭
・九月十八日(祝)
午後一時半より読経

※彼岸会大法要
・九月二十三日(祝)
午前十時半始め

※秋のお墓参り
・九月三十日(土)
午前九時～十時半
★納骨をご希望の方は、事前にお申し出ください。

※九月行事の詳細は、九月号にてご確認ください

〒451-0042
名古屋市西区那古野１－１１－７
長久山　円頓寺
Tel　０５２（５５１）３７６８
ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ http://endonji.web.fc2.com/
ﾒｰﾙｱﾄﾞﾚｽ shiota.houyuu@gmail.com
長久山円頓寺　検索
【E-mail はﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞを経由しても送れます】